◎特別寄稿1

「茶色い戦争と、中也さんと、僕の映画と。」

大林宣彦

◎特別寄稿2

「中也生活」

三角みづ紀

◎常設テーマ展示

「中也　愛の詩—いとしい者へ」

◎特別企画展

「『文学界』と中原中也—1930年代の文芸復興」

◎企画展

「旅する中也—汽車の笛聞こえもくれば」

◎特別展示

「東日本大震災と詩」
「第18回中原中也賞」
「新発見書簡展示」

◎新収蔵資料紹介

安原喜弘旧蔵書・レコード
「詩人時代」昭和11年4月号

◎記念館ニュース

神奈川近代文学館「『中原中也の手紙』展—安原喜弘へ」
中也ウィーク

主なできごと（平成25年度 行事記録）
第19回中原中也賞受賞作品
平成26年度　行事予定

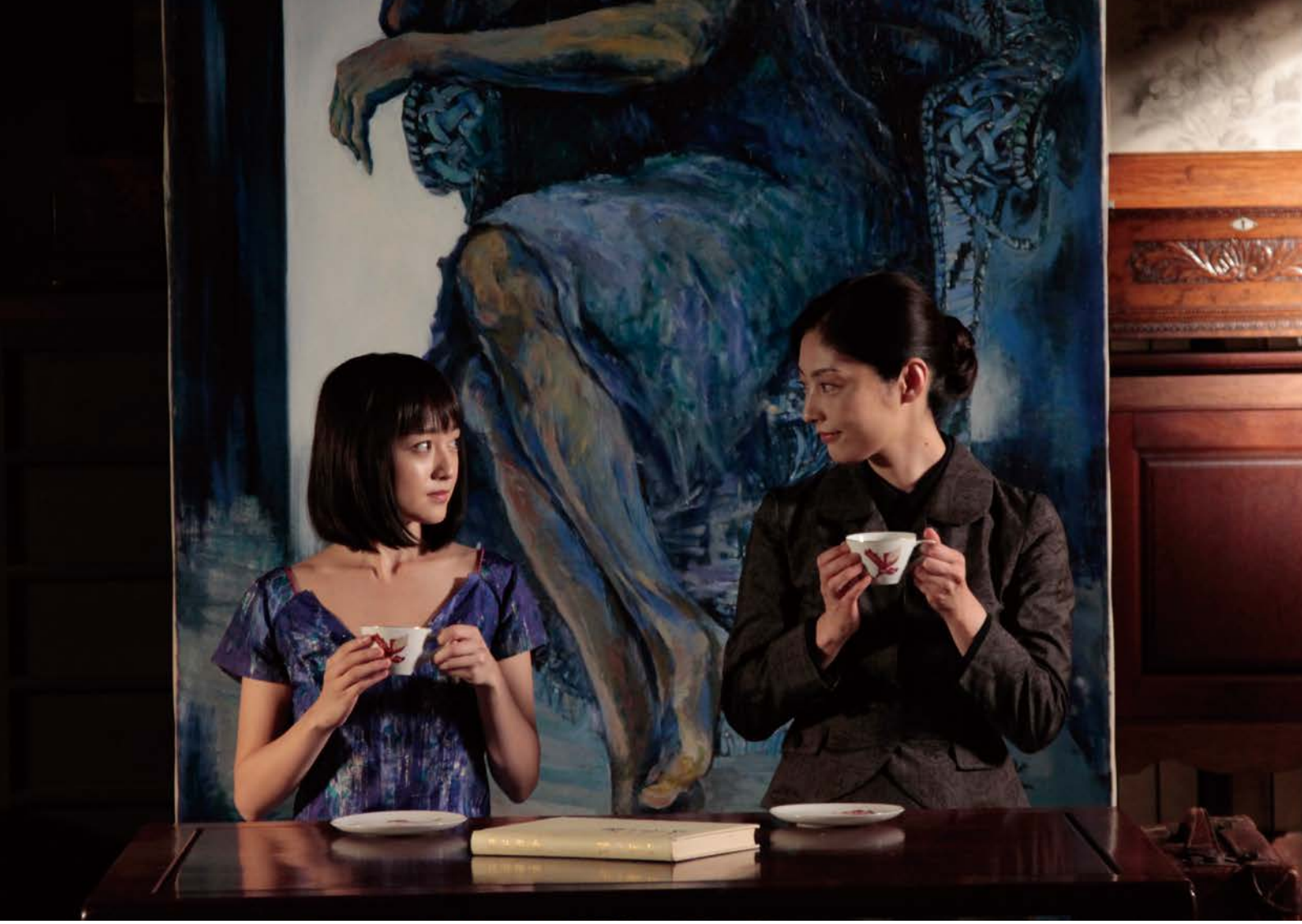
中原中也記念館
館報2014

19

Public relations magazine
第19号

20
中原中也記念館
開館20周年

Chuya Nakahara Memorial Museum



©芦別映画製作委員会・PSC

特別寄稿1 | Special contribution 2014 |

茶色い戦争と、中也さんと、僕の映画と。

text=Nobuhiko OBAYASHI
大林宣彦（映画作家）

中原中也さんとのお付き合いは、僕がほんの子どもの時分からである。

その事には、註釈が色いろと付く。

先ずは、中原中也さん、とさん付けで呼ぶ。といって、個人的な面識など、あろう筈が無い。普通ならば、中原中也、それで良い。然しこの僕は、中原中也さん、とさん付けで呼ぶ。それでなくては、「中原中也」ですら無い。

僕が生まれたのは、1938年の1月9日。その前年の37年10月22日には、中原中也さんはこの世を去っている。現世でのお付き合いどころか、その生は丁度、順繰りに受け渡されたような按配である。むしろ運命的には、それを出逢いと呼んでみたい、そんな衝動に駆られる。

二つの生を結んだのは、「ゆあーんゆよーんゆやゆよん」である。その頃僕が暮らしていた、広島県・尾道市の、明かるい瀬戸内の海の煌めきを見霽かす、山の中腹にある古い医家の、二階の畳の上で、年上の小父がその痩せて、青白い、細い腕で、一所懸命この僕を抱き上げて、同じく蒼白な額に汗を滴せながら、日がな一日、そう唱えていたからだ。

その村上順祥という名の小父は、三十歳で死んでいる。村上と名乗るのは、母方の小父であるからだが、思えば中原中也さんが世を去ったと同じ年齢である。死因は結核。当時はむしろ肺病と呼んだ。思えば文学好きの小父だった。僕が後に大層な文学少年に育ったのも、この小父の影響であるのかも知れない。文学を良くするためには、肺病にならなくっちゃ、と二十五の年まで、僕はそう決意していた。そういう時代のお話である。

さて、その順祥小父に、天井近くまで抱き上げられて、「ゆあーんゆよーんゆやゆよん」と左右に揺さぶられていた僕は、しかしこの光景を極めて鮮明に記憶しているのだから、その頃にはもう、ある程度の年齢には達していた事であろう。

最初は「なかはら　なかや」さんだった。小父がそう発したか、或るいは当時、その家の中で一緒に暮らしていた大勢の小母たちの内のひとりが、「順兄ちゃんの、ゆやゆよんはのう、なかはら　なかやさんの詩からなんよお」と、後になって教えてくれたからか。

こうして「なかはら　なかや」さんの「ゆあーんゆよーんゆやゆよん」は、僕の中にもう永遠に、棲みついて了ったのでありました。

幼い子どもが或る詩人と出逢って、一生にわたり甚だ強い影響を受ける。その物語は、どちらに於いても、おおよそこんな風にして、始まってゆくものでありましょう。

その「なかはら　なかや」さんが、実は、「なかはら　ちゅうや」さんであった！

と知るのは、僕がいくつの頃だったか？

望んだようには、肺病にもならず、青白い顔にもならず、瀬戸内の強い日差しに真っ黒けに日焼けしながら、お気に入りの四百字詰めの原稿用紙に日がな一日向かい合って、拙い文章を草していた、そんな日日の中であったろうか。いつか小説家になろう、と漠然とではあるが、運命的にそう念じながら、同時に真昼の屋根に登り、熱い瓦の上に座して遠くに望む海に向かって、8ミリ映画のキャメラを廻していた。

「中原中也」の名の中の、同じ文字である「中」の字を、「なか」と「ちゅう」と二つに詠み分ける。それは、何という謎めいた、不思議な未知の森に分け入るに似た、我が身を絡み取られるような、「文学」であることだろう！　この「なかはら」と「ちゅうや」との邂逅には、中也さんの側にも家庭の事情が色いろあっての事と臆測できるが（中也さんのお父上は柏村謙助と発しられ、中也さんが八歳の折、中原家との養子縁組を届け出て、一家は中原姓となった、と聞く）、言葉とは人の世の事情に影響され、世界の情勢にも玩ばれて数奇な運命を辿るもの。その乱れにひとつの筋道を与え、均衡を保持する事が、「文学」の役割ではないのか。「なかはら」と「ちゅうや」との結び付きに、僕はそのような、極めて純・文学的な「感動」を覚えていたのでありました。

小学校の高学年か、或るいはもう中学生になっていたのか、仲間を集めて同人雑誌など編み始めていた、そんな時期、僕は中原中也さんの詩集『山羊の歌』の、「サーカス」と題された一編の詩の中に、件の「ゆあーんゆよーんゆやゆよん」を発見し、そこにまた「茶色い戦争ありました」の一文がある事を知って、驚喜の如く、愕然（?!）とする。僕らは正にその「茶色い戦争」の落し子であるという自覚をみな持っていて、あの敗戦で子どもながら（いや、子どもであればこそ、一層）死ぬ、或るいは、殺される、覚悟を決めた世代である。それが占領国の連中に、日本人の精神年齢は十二歳であると定められ、チョコレートにチューインガム、占領政策のアメリカ映画を雨あられの如く見せられて、すっかり敵国だった米英の、赤鬼・青鬼諸氏に憧憬し、分けの分からぬ「平和」の中に放り出されていた。僕らは、いわば「平和難民」である事に、子どもであるが故にどこかで本能的に気付き、密かに怯えてもいたのである。故に僕らの不思議な「戦争」と「ゆあーんゆよーん」が結び付き、それが更に、「サーカス」であるとは！　実はこの僕、その頃地方の町まわりをしていた貧しいサーカス団の、綱渡りの少女に憧れて、テントを畳んで旅立つ一行の後を追ってどこまでも歩いてゆき、青白い月夜の田舎道をただ独り、とぼとぼと流離いながら町まで帰った記憶がある。恐かった。月夜の道は歩くもんじゃない。「ポッカリ月が出ましたら、／舟を浮べて出掛けませう」。

「お月さま　ぽっかり／お魚になったわたし」。これは後に僕が拵えた、あるお風呂のコマーシャルフィルムの主題曲である。大層ヒットした。これは中也さんの「湖上」の一節と、太宰治の「魚服記」から引いた戯歌である。太宰のこの短編は、太宰の作品の中でも抒情の極みの、美しい一編の詩のような作品で、滝壺に身を投じた若い娘が、真白な魚となって蘇るというお話だったか。古い記憶だが、その記憶と中也さんが合体してお風呂のコマーシャルとなった。僕の青年期の作品である。おかしな話だが、あの頃の文学青年にとっては、肺の病もさることながら、早世することもまた、憧れであった。僕らが憧れる詩人や文士たちは、悉く四十の声を聞く前にこの世を去っていたのである。夙く死ぬことへの命の思いが、創作活動に向かわせていたのかも知れぬ。因って僕が三十の歳を数えた時の自主映画『CONFESSION＝遙かなる憧れギロチン恋の旅』の中では、主人公の青年が古里の海を見詰めて、ふと口にするのである「思えば遠く来たもんだ」。そして僕はまるで詩人や小説家がただ独り、原稿用紙に向ってペンを走らせるように、個人の芸術としての「映画」を作ってゆこうと考えるようになり、企業の職能としての「映画監督」ではなく、個人で作る映画の「映画作家」として、この世を生きることとなる。妻がプロデューサー、ひとり娘も参加して、そういう映画を作って現在七十六歳。現在編集しつつある新しい映画の中でも、いま再びの「思えば遠く来たもんだ」と謡ったところであります。

思えば、僕の映画には度度中也さんが登場して参ります。『四月の魚』という映画では高橋幸宏君が、こよなくロマンチストであるが故に時流に合わず、売れない映画監督として世を拗ねて、その反動でだかフランス料理が大のお得意。密かに思いを馳せる少女のために作る料理にグラーブの白を添えて。そのグラーブが乾いた小石の敷かれた土地で採れる葡萄から、というので、調理をしながら中也さんの詩を呟いて、「秋の夜は、はるかの彼方に、／小石ばかりの、河原があって、／それに陽は、さらさらと／さらさらと射しているのでありました」、と切ない程に純なる抒情を生みましたね。また『SADA　戯作、阿部定の生涯』では、幼い頃の定が独りでお留守番。「お太鼓叩いて　笛吹いて／遊んでいれば　雨が降る／襦子の外に　雨が降る」、と声が読み上げる。いまや失われっちまった、日本の抒情を醸し出しますね。

さて本題は、僕の出来上がったばかりの映画『野のななのか』。この映画の冒頭には、中也さんの「羊の歌」の「I　祈り」から、次の断章が引かれている。「それよ、私は私が感じ得なかったことのために、／罰されて、死は来たるものと思うゆえ」。2013年（あれから二年が過ぎた）3月11日・14時46分に、北海道央の芦別市に於いて九十二歳で大往生を遂げた、ひとりの老人の物語である。老人はあの戦争の時代を「青春」として生きた日本人で、いまやその日本人の誰もが知らず、忘れようとしている、樺太に於けるソ連軍との敗戦の記録。何と九月の五日まで続いていた戦禍の中で、いとしい恋人の死と遭遇する。その娘の愛読書が中也さんの『山羊の歌』で、映画全編に於いて中也さんの詩句が、恰も死せる老人の独白の如く謡われ続ける。そしてそれは、この僕自身の独白、いや告白ともなっているのだ。僕ら「敗戦少年」の世代は、あの戦争も、敗戦のありようも、何も伝え残しては来なかった。その結果日本人は、戦争を忘れ、無かった事のようにすらして、「平和難民」として物質面のみの復興・繁栄に身を俏して来た。その我が「心」を失念していた愚に3・11ではたと気付き、日本の未来に向けて真の再生の道筋を探り始めている。こういう時にこそ、過去から学ばねば。

生き残った者が、未来へ伝え残す覚悟。これが現在の、僕の「映画術」であります。日本の敗戦後を生きたひとりの日本人として、いまこそ我が遺書の如き映画を創ろう。そう覚悟した僕の魂に、中原中也の言霊は極く自然に寄り添ってくれたのである。有難い事であります。この映画の完成試写の日に、「中原中也記念館」館長の中原（このお名前も、偶然の「中原」であると仰る！）豊さんをお招きしたところ、「きょうは中也さんの、命日なんですよ」。これもまた偶然か、必然か?!

否、それを運命と呼んでみよう。これが、僕と中也さんとの物語である。思えば「ゆあーんゆよーんゆやゆよん」、あれは、「落下傘奴のノスタルジア」で、ありましたか!!

©芦別映画製作委員会·PSC　映画『野のななのか』より（1ページも）

『山羊の歌』（昭和9年12月、文圃堂書店）

中原中也の第一詩集であり、中也の生前発行された唯一の詩集。限定200部の自費出版で150部を頒布（頒価3円50銭）。装幀は詩人の高村光太郎による。

大林宣彦

大林宣彦　*Nobuhiko OBAYASHI*

1938年広島県・尾道市生まれ。個人映画作家。幼少期より自宅の蔵の中で出会った活動写真機と遊び、映画を独学。長じて8ミリ映画で自作を世に問うようになり、『転校生』『時をかける少女』などの古里映画も著名。紫綬褒章、旭日小褒章他、国内外での受賞も多い。妻・恭子が主宰する個人事務所で、映画製作に励んでいる。

特別寄稿2 | Special contribution 2014 |

中也生活

text=Mizuki MISUMI
三角みづ紀（詩人）

詩人とは孤独でしょうか。詩人とは詩のために幸せを放棄しているのでしょうか。

中原中也はもちろん幼少から著名な詩人として耳にする名前でありましたが、わたしが明確に直面することになったのは九年前、第十回中原中也賞を受賞したときでした。受賞のご連絡をいただいた直後、すぐに電話にて新聞の取材となったのですがあまりに動揺してしまったわたしは「とりわけ中也に詳しくありません」とコメントしてしまった記憶があります（そのコメントは記者さんがうまく誤魔化してくださったのでしょう、記録にはないのです）。

冬、鹿児島の家から窓の外をながめて今はもういないゴールデンレトリバーの空ちゃんが庭ではなく居間をかけまわり、梅の木がふるえるように枝を揺らした夕刻でした。それ以来、中原中也という詩人が、山口という土地がぐっと身近になってゆきました。

中也は悲しみに汚れることができ、ゆあーんゆよーんというそれまで目にしたことのない言葉を用い、自身の骨を露呈することができるいっぷうかわった詩人であることはまちがいないでしょう。けれど、わたしにとって中也という詩人はあらゆる風景を詩にしてしまう「描写の詩人」に感じます。『在りし日の歌』のあとがきには、こう書かれています。

詩を作りさへすればそれで詩生活といふことが出来れば、私の詩生活も既に二十三年を経た。もし詩を以て本職とする覚悟をした日からを詩生活と称すべきなら、十五年間の詩生活である。

長いといへば長い、短いといへば短いその年月の間に、私の感じたこと考へたことは尠くない。今その概略を述べてみようかと、一寸思つてみるだけでもゾッとする程だ。私は何にも、だから語らうとは思はない。たゞ私は、私の個性が詩に最も適することを、確実に確めた日から詩を本職としたのであつたことだけを、ともかくも云つておきたい。

こう記して友人の小林秀雄に原稿を託し、中原中也は東京での生活（それは詩を本職と覚悟した十五年の殆どを占めます）に別れを告げました。故郷にこもるはずが、三十歳という若さで夭逝。鹿児島の冬の庭をながめていたわたしは二十三歳でしたが、いまは中也の年齢も過ぎてしまったことに時折、愕然とします。

詩人が詩人であると自覚したときに伴うのは、孤独になることでもなく幸せを放棄することでもなく、日常も非日常も、すべての視点を「詩」にしてしまうことだと考えます。たわいもないような些細な出来事すら詩として作品にする。それは決して容易ではなく、家族や友人、周囲のひとびとをくるしませることにも成りうる危険な決意でもあり、現にわたしは詩人として作品のなかに母という言葉を何度も用い、最近では「あの子の詩にでてくるおかあさんはわたしじゃない」と笑いながら言えるようになったと、母に教えてもらったほどです。詩とははかなくも美しい刃であること。

描写の詩人はますます風景を詩にすることができる。それ故、苦悩も増えたのではないでしょうか。けれど『在りし日の歌』のあとがきにある通り、中原中也の個性は詩に最も適していたのだから仕様がない。

わたしがこの原稿を書くにあたり、何度も中也の詩集を読みかえしました。冬の最中、肉声を帯びるように響いたのは「冬の夜」です。

空気よりよいものはないのです
それも寒い夜の室内の空気よりもよいものはないのです
煙よりよいものはないのです
煙より　愉快なものもないのです

この愉快とは、中原中也自らの孤独であるとも感じます。それから、中也はこう続けます。

やがてはそれがお分りなのです
同感なさる時が　来るのです

ええ、非常に、痛いくらいに同感することができます。自分には詩しかないのだと実感し、お言葉を借りるならば「私の個性が詩に最も適する」ことを自覚してから、わたしはわたしからどんどん剥離していきます。うれしいと感じるときもかなしいと泣きたいときも、文字に記してからでなければ実感できなくなったのです。わたしという存在を俯瞰して記して十年ほど、生きている自分と詩人として存在する自分の距離は離れていきます。「冬の夜」になぞって、ストーブもない台所にて煙をふかしていたら霞でも食べて生きているような絶対的な孤独感にあふれ、それすらも幸福と感じることができ、詩人とはなんてすばらしいのだろうと叫びたくなりました。深夜であったので近所迷惑になるとかんがえ、叫ぶのはやめておきました。中也ならば叫んだであろうと想像します。わたしの台所はとても狭く、冬らしく買ったみかんが箱にはいったまま、愛用しているマグカップは薄汚れ、換気扇はこわれてまわることを放棄している。埼玉の郊外なのでおどろくほど夜半の星は明確で、空気

るひとびとは詩人となり、真昼のあたたかい日差しが公園の木々の葉を通過して影をつくり、ガラス越しにのぞく景色は詩そのものでした。

話を中也に戻しましょう。「蟬」という詩があります。

蟬が鳴いてゐる、蟬が鳴いてゐる
蟬が鳴いてゐるほかなんにもない！
僕の怠惰？　僕は『怠惰』か？
僕は僕を何とも思はぬ！

蟬が鳴いている夏の盛りに、詩人にとってその声が糾弾のように響いたのであろうか？　それも、中也という人物の孤独を反映して、あたかも「怠惰」と指摘されたように。というのはわたし個人のたいらな解釈でありますが、おそらく中原中也が表したかったのは、この四行、そのままなのです。蟬が鳴いているほかなんにもなく、僕は僕を何とも思わない夏の情景。一九三三年、八月十四日に書かれた詩。

もしかしたらこの四行も文学として読者に不親切なものかもしれませんが、このように現実の事象と思考とを直結させストレートに表現できる部分が、中原中也を「描写の詩人」と感じる所以です。そうして、やはり、わたしが好きな中也の詩は外界と精神の結びつき方、それもひどく異様に、やはりいっぷうかわった、けれどストレートな結びつき方をしている作品です。

以下に引用する「閑寂」も、現実の事象と思考の結びつき方が唐突ともとれる詩です。

締めの足りない水道の、
蛇口の滴（しづく）は、つと光り！

土は薔薇色、空には雲雀
空はきれいな四月です。

なんにも訪（おとな）ふことのない、
私の心は閑寂だ。

も濁っておらず、隣の隣の家のおじいちゃんは秋になると柿をわけてくれます。

数年前、東京の杉並区、善福寺にあるだだっぴろくて素敵な閑散とした公園のほど近く、葉月ホールハウスという所で詩のイベントがありました。壇上についた数人の女性詩人たちとトークをおこない、

「詩ってあとから追ってくるじゃありませんか」

そう、わたしが投げかけた瞬間、そこに居た詩人たち全員が頷いたのです。なんとも愉快な瞬間でありました。詩人でなければおそらく同意できない（もしかしたら理解もできない）不親切なひとことです。

詩はあとから追ってくるものです。書いた作品が意図せず書いている最中とはちがう意味と実感をともない、過去の作品が唐突におそってくることがしばしばあります。

「ああ、あのとき書いた詩はこのことだったのね」

と、まるで作者が自分ではないような感覚にとらわれ、それは不思議な体験に思えますがその場に居た詩人たちにとってもあたりまえのようなことなのでしょう。詩があとから追ってくる。

このように、個性が詩に最も適してい

空はきれいな四月だというのに、中也の心は閑寂という。それもまた孤独なのであろうが、嘆いてはいない。

自分が詩人以外のなにものでもないと自覚した人間の持つ瞳はすべてを詩にしてしまうそらおそろしさ。ゆるんだ蛇口を締めるという行為より先に言葉にしてしまうのですから、生きるということになんとも不適合で高級な時間を過ごす、やすらかではない、いきもの。

今、わたしがこうやって書いている台所の外を灯油売りが音をたてて通過し、二〇一三年十二月のおわり、浮かれているのか沈んでいくのか、カレンダーの過ぎた日にばつをつけながら四年間住んだこの家に別れを告げようとしています。

高校を卒業して上京し、二年弱で病気療養のために実家のある奄美大島へ戻り、大学復学のためにふたたび上京して五年ほど経ち、もっと自分と向き合いたく東京から離れました。ここでは、はじめから新鮮な風景と変哲もない風景が混じりあっています。そうしてまた、わたしは都心からますます離れようとしています。詩人が詩と向き合うには魂ひとつ、体ひとつあれば良くって、そこには詩を求める心がありました。詩人には詩さえあれば孤独でも不幸でもないのです。

わたしたちは自らの個性が詩に最も適していることを確かめてしまったのですから。『在りし日の歌』のあとがきは、こうしめくくられています。

私は今、此の詩集の原稿を纏め、友人小林秀雄に托し、東京十三年間の生活に別れて、郷里に引籠るのである。別に新しい計画があるのでもないが、いよいよ詩生活に沈潜しようと思つてゐる。扨、此の後どうなることか……それを思へば茫洋とする。

さらば東京！　おゝわが青春！

『在りし日の歌』（昭和13年4月、創元社）
中原中也の第二詩集であり、最後の詩集。中也の没後、友人たちの手で刊行された。58篇の詩と巻末の「後記」により構成されている。

写真は4枚とも筆者撮影

三角みづ紀 *Mizuki MISUMI*

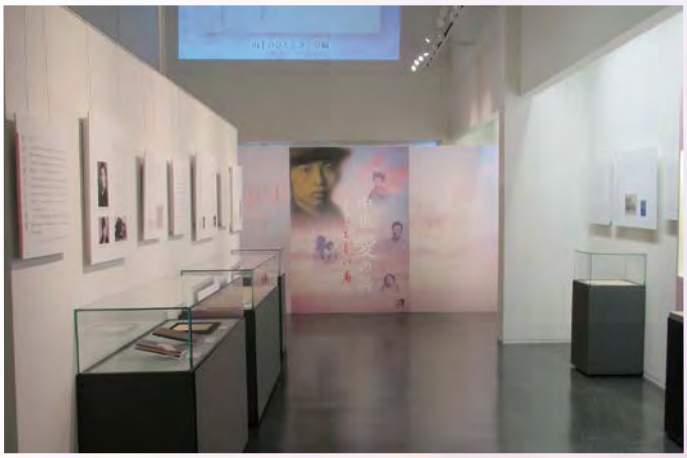
1981年鹿児島生まれ。東京造形大学在学中に第42回現代詩手帖賞、第10回中原中也賞を受賞。執筆の他、朗読活動も精力的に行い、スロヴェニア国際詩祭やリトアニア国際詩祭に招致される。近時の主な活動は坂本美雨らに歌詞を提供、第55回ヴェネチア·ビエンナーレ日本館におけるプロジェクト『a poem written by 5 poets at once』に参加。『連詩　悪母島の魔術師』にて第51回藤村記念歴程賞を受賞。あらゆる表現を現代詩として発信している。

第11回 常設テーマ展示

中也愛の詩 ―いとしい者へ

Chuya Ai no Shi

平成26年2月16日(日)―平成27年2月15日(日)



展示1

中也は、恋人や家族をどのようにいとおしみ、作品に描いていたのでしょうか。

女優・長谷川泰子をめぐる出会いと別れは、作品へと昇華され、「時こそ今は……」や「盲目の秋」など、魅力的な恋愛詩をたくさん生み出しました。

一方で、中也は家族に対しても愛情を注ぎ、日記や書簡には、妻・孝子や母・フクに対する細い心配りが表れている他、幼い息子を深く愛し、さまざまな子どもの姿を詩の中に描いています。

本展では、中也の作品や書簡などに表れる、さまざまな「愛」の表現を紹介しました。

1 恋人よ

中也の初恋は、山口中学校一年生の時でした。父方の親戚の家を訪れた際、一人の少女に出会い、淡い恋心を抱きます。しかし、この恋は結局実ることはありませんでした。

その後、文学に熱中し山口中学校を落第してしまった中也は、京都の立命館中学校へ転入します。京都の地で出会ったのが、3歳年上の女優・長谷川泰子でした。中也と泰子は下宿で同居生活を始め、共に上京します。しかし泰子は、中也と交友のあった小林秀雄の元へと去ってしまいます。泰子との別離は中也に深い影響を与え、詩における大きなテーマとなっていきます。一方で、恋愛というテーマを描きながら、自らの生き方や思想を見つめようという姿勢が表れ、恋愛詩という枠を超えた、倫理的な深みを持つ作品へと発展していきます。

展示1では、中也の初恋と、長谷川泰子との出会いと別れについて取り上げ、中也の恋愛詩について紹介しました。また、晩年の泰子が中也との思い出を語った『ゆきてかへらぬ　中原中也との愛』(村上護編)のインタビュー音源を初公開しました。

《主な展示資料》

中原中也草稿「初恋集」「我が生活」「別離」「山上のひととき」、「ノート1924」、長谷川泰子述・村上護編『ゆきてかへらぬ　中原中也との愛』、『山羊の歌』校正刷(「憔悴」の頁)、長谷川泰子インタビュー音源

長谷川泰子
インタビュー音源
試聴コーナー

展示1

2 家族へ

大正14年に上京後、中也は次第に詩人として活動の場を広げていきます。そんな中也を陰ながら支えたのは、郷里・山口から仕送りを続ける母のフクでした。第一詩集『山羊の歌』を出版する際も、フクは印刷資金を援助しました。

昭和8年、中也は遠縁にあたる上野孝子と見合いをし、山口・湯田の西村屋旅館で結婚式を挙げました。2人は、東京の四谷花園町にある花園アパートで新婚生活を始めます。よく笑う明るい気立ての孝子は、中也の生活に平安をもたらしました。昭和9年には、孝子との間に長男・文也が生まれます。中也は文也を非常に可愛がり、赤ん坊を題材とする詩が多く書かれるようになります。

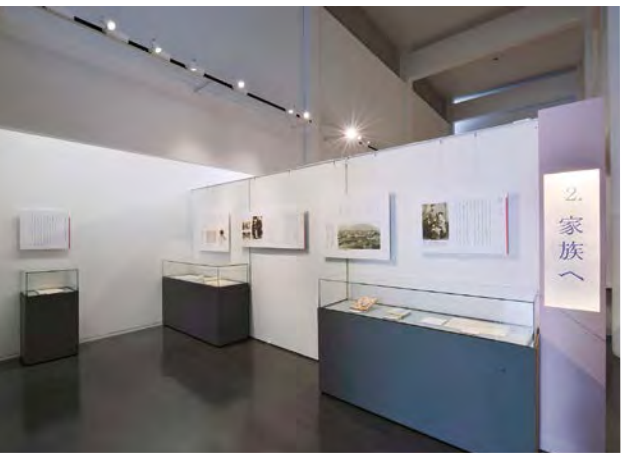
しかし昭和11年、最愛の文也が小児結核により2歳で亡くなってしまいます。文也の死から約1か月後には、次男・愛雅が誕生しますが、文也を喪った悲しみが癒えることはなく、中也は心身に変調をきたし、千葉県の中村古峡療養所に入院します。退院後、鎌倉での新しい生活を始めた中也は、しだいに落ち着きを取り戻し、日記や書簡に愛雅の健康状態を記録し、細かく気を配ります。

亡くなった文也への愛情は、哀悼詩という形で表現されるようになり、一方で「子守唄よ」のように、子どもを慈しむ母親の立場に寄り添う心情が出てくるなど、中也の愛の表現はさらなる広がりをみせます。

展示2では、家族への愛情に焦点を当て、作品には直接的に表現されることの少ない、妻・孝子や母・フクに対するやすらぎや心遣いを、書簡や様々なエピソードをふまえて紹介しました。また、息子たちへの愛情、赤ん坊や幼い者、母親に対する複雑で多様な詩の表現にも着目しました。

《主な展示資料》

中原中也草稿「坊や」「吾子よ吾子」「詩的履歴書」、「早大ノート」（嬰児」の頁）、中原中也筆安原喜弘宛書簡（昭和9年6月24日）、「新女苑」昭和12年7月増大号、中原フク述・村上護編『私の上に降る雪は　わが子中原中也を語る』、西村屋旅館の結婚披露宴献立表（昭和初期）



展示2

特別企画展

「文學界」と中原中也

―1930年代の文芸復興

平成25年8月29日―10月31日

「文学界」は昭和8年に創刊された一九三〇年代を代表する文芸誌です。当時の文壇では、《文芸復興》を合い言葉に、新しい文学を望む気運が高まっていました。商業的要請ではなく、真に書きたい作品を発表する場を求めていた文学者たちは、編集にまで携わる雑誌として「文学界」を創刊します。

中原中也は、詩21篇、訳詩2篇、評論2篇を「文学界」で発表し、その詩の多くを第二詩集『在りし日の歌』に収録しました。また、「文学界」に携わった人々には、小林秀雄、河上徹太郎ら中也の友人・知人が多くいます。

本展では、中也の直筆原稿や、「文学界」とその時代にまつわる資料等を通じて、中也と「文学界」の関わりを多面的に紹介しました。

1 創刊と再刊

昭和8年10月、雑誌「文学界」は創刊されました。目指すところは「文学者自身の手による文学雑誌」（「『文学界』創刊の挨拶」）です。創刊に関わった編集同人たちは、自由な発表の場を作るべく、自ら編集にも携わりました。

展示1では、まず「文学界」の発行元兼編集者・田中直樹宛の書簡を中心に「文学界」創刊前後の様子についてを紹介、さらに、二度の廃刊の危機を救った小林秀雄や文圃堂書店主・野々上慶一の活躍を紹介しました。また、昭和10年3月から昭和19年4月の休刊まで「文学界」の全ての表紙デザイン・装画を手掛けた青山二郎が描いた「文学界」の表紙下絵や愛用の道具などを展示しました。

《主な展示資料》
「『文学界』創刊の挨拶」（印刷物）、「文学界」同人寄せ書き、田中直樹宛林房雄書簡、青山二郎「文学界」表紙下絵

2 「文学界」で読む中也

昭和9年7月、中原中也は評論「詩と其の伝統」を「文学界」に発表します。これが中也の「文学界」デビュー作です。中也が本格的に作品を発表するようになるのは、小林秀雄が編集を取り仕切るようになった昭和10年からです。小林は中也の詩を高く評価し、「文学界」でも積極的に紹介しました。

その後中也は、ほぼ毎月作品が掲載される常連の詩人として活躍します。当時「文学界」常連の詩人は中也しかおらず、萩原朔太郎は、「文学界」昭和12年1月号に発表した「現代詩壇総覧」で、中也を「『文学界』が生んだ唯一の新進詩人」と評しています。

展示2では、中也が「文学界」に発表した作品を、直筆草稿や日記などの関連資料とともに紹介しました。

《主な展示資料》
中原中也訳稿「音楽堂にて」（ランボー）、中也自筆草稿「冬の長門峡」、中原中也日記「建設社版自由日記」、安原喜弘宛中原中也書簡

3 「文学界」の展開

「文学界」には、文学に夢を抱いた多くの人々が集い、理想の雑誌作りに邁進しました。しかし、同人費制をとらなかった「文学界」は、売れないと利益が出ないため、売れるための魅力作りも必要でした。また、戦局の悪化は徐々に言論の自由を圧迫していきました。

展示3では、不況と言論統制という困難に挑む「文学界」の人々を、「編輯後記」と「文学界賞」、彼らの集った会合に焦点を合わせ、中也と小林秀雄の草稿や「文学界」発表作の単行本などを通じて紹介しました。

《主な展示資料》
中原中也草稿「六月の雨」、小林秀雄直筆草稿「ドストエフスキイの生活」

4 中也没後の「文学界」

昭和12年10月22日、中原中也は結核性脳膜炎により30歳の若さで亡くなりました。中也の死は「文学界」の人々にも大きな衝撃を与え、同年12月号で早速追悼特集が組まれました。同様の中也追悼特集は他の雑誌でもいくつか組まれましたが、中也と親しく交遊した人々による「文学界」の追悼特集が最も充実した内容となっています。

中也の死後、「文学界」は文学を軸としながらも、文化全般について目配りする誌面構成を続けていきますが、昭和19年4月号を最後に休刊しました。戦後、昭和22年に再刊され現在に至ります。

展示4では、中也や小林秀雄の直筆原稿などにより、中也追悼号について、さらには中也没後の「文学界」について紹介しました。

《主な展示資料》
中原中也草稿「少女と雨」「月夜とポプラ」、小林秀雄直筆草稿「西行」

展示4

展示1

企画展

旅する中也
―汽車の笛聞こえもくれば

平成25年3月27日(水)～8月25日(日)

中也は様々な場所を旅しています。昭和7年には、詩人で友人の高森文夫と共に宮崎や熊本などを巡り、昭和10年には雑誌「紀元」の同人たちと、伊豆大島に一泊旅行へ出かけます。以前住んでいた金沢や京都を再訪することもありました。そういった中で、中也は自身の過去と向き合ったり、旅先での体験を元に作品を作ったりしています。

この展示では、古い絵はがきや地図などを手がかりに、当時の風景を再現しながら、中也の旅に対する思いに迫りました。

1　中也が旅した土地

「友人との旅 ―九州―」、「雑誌の同人たちと ―伊豆大島―」、「過去を旅する ―金沢・京都―」の3パートに分けて、地図や画像を交えて中也の旅の様子を紹介しました。

「友人との旅」では、中也が高森文夫とともに、九州を巡った旅を、高森とのエピソードを交えながら取り上げました。また、高森の詩業についても紹介しました。

「雑誌の同人たちと」では、雑誌「紀元」の同人たちと伊豆大島へ出かけた旅を取り上げ、伊豆大島へと向かう汽船「葵丸」に乗船した際の感慨をうたった詩「大島行葵丸にて」を展示しました。

「過去を旅する」では、幼年時代を過ごした金沢と、中学生時代を送った京都を再訪した中也が、自身の過去と向き合うなかで綴った、書簡や随筆を紹介しました。

2　汽車の旅路

当時の汽車旅の様子を紹介しながら、汽車や駅が出てくる作品を紹介しました。そして、中也も利用していた山口線沿線の長門峡を舞台とした「冬の長門峡」についても取り上げました。また、当時の時刻表や旅行案内書、中也と同時代の山口線の切符などを展示しました。

3　旅情をうたう

中也が「羊の歌」で「汽車の笛聞こえもくれば／旅おもひ、幼き日をばおもふなり」とうたったことにちなみ、汽笛の音色に旅情を感じながら、過去の幼い日々へと思いを馳せる心情を描いた詩や評論を紹介しました。

また、晩年に友人宛の書簡で、自らを「旅情の餓鬼」と称し、故郷へ帰り、月の半分を旅行して暮らしたいと記した中也の心境にも迫りました。

《主な展示資料》

中原中也草稿「大島行葵丸にて」「冬の長門峡」「Me Voilà」、安原喜弘宛中原中也書簡（昭和12年9月2日）、「四季」昭和12年12月号、「隼」昭和11年10月号、高森文夫『浚渫船』

昼寝する中也（宮崎を旅行中に高森文夫が撮影）
提供：若山牧水記念文学館

exhibition

特別展示

東日本大震災と詩

平成25年3月1日〜24日

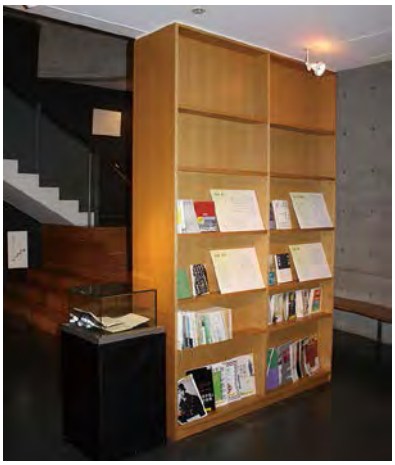
全国文学館協議会による共同展示「文学と天災地変」への参加企画として「東日本大震災と詩」と題する特別展示を開催しました。

この共同展示は、東日本大震災をはじめ、関東大震災、阪神淡路大震災など、わが国の天災地変を文学者がいかに感じ、いかに考え、いかに表現したかを、文学展を通して伝えようという趣旨のもと、全国の41の文学館がほぼ同時期に、共通テーマ「文学と天災地変」による企画展を開催する初めての試みでした。

当館では、中原中也賞受賞詩人を中心に焦点を当て、東日本大震災被災地出身・在住の和合亮一氏、須藤洋平氏、辺見庸氏（受賞順）、また、選考委員を務める中村稔氏（第10回まで）、佐々木幹郎氏の5名の詩人を紹介し、彼らが震災後に発表した作品や自筆資料を展示しました。

本展開催に際し、中村氏からは新作詩の書「私は物言うのを止めねばならぬ」、「駅前広場・未来風景」をご寄贈いただきました。また、和合氏からは、東日本大震災発生当時に使用し、その後『詩の礫』などの作品の元となった手帳をお借りし、公開しました。紹介した作品には、詩人たちがこの未曾有の災害に衝撃を受け、今そこにある問題として切実に考えていることが映し出されています。それゆえに、同じ今を生きる私たちの心に響くのだといえるでしょう。

なお、この共同展示は平成26年も継続され、「三・一一文学館からのメッセージ―天災地変と文学」と題して全国の文学館で開催されました。



第18回中原中也賞

平成25年4月26日〜5月26日

第18回中原中也賞関連資料の特別展示を4月29日の贈呈式に合わせて行いました。

受賞詩人の細田傳造（ほそだでんぞう）氏は受賞当時69歳。詩作を始めたのは平成20年からで、第一詩集の『谷間の百合』（書肆山田）により、中原中也賞歴代最高齢での受賞となりました。

この特別展示では、受賞作のほか、本展のために書き下ろしていただいた新作「さくら」、「おぼろよ」、「なつきにけらし」の直筆原稿を公開しました。展示室では、本棚に置かれた受賞作と第二詩集『ぴーたーらびっと』（書肆山田）を熱心に読む来館者も多く、日常を描きながら非日常への境界を軽々と越えていくような細田氏の詩世界に触れていただきました。

このほか、最終選考に残った他の詩集、白鳥央堂（ひさたか）『晴れる空よりもうつくしいもの』（思潮社）、高塚謙太郎『カメリアジャポニカ』（思潮社）、疋田龍乃介『歯車VS丙午』（思潮社）、ブリングル『そうして迷子になりました』（思潮社）、望月遊馬（ゆま）『焼け跡』（思潮社）、後藤ユニ『サマーバケーション・イン・マイ・ヘッド』（私家版）を併せて紹介しました。

新発見書簡特別展示

平成25年8月13日〜25日

平成25年4月に発見された安原喜弘宛中原中也書簡の特別展示を行いました。

この書簡は、特別企画展「中原中也の手紙―安原喜弘との交友」（平成24年8月30日〜10月29日）、および神奈川近代文学館の企画展「『中原中也の手紙』展―安原喜弘へ」（平成25年6月15日〜8月4日）の開催に向けて行った安原喜弘旧蔵資料の調査の過程で発見され、神奈川近代文学館での展示を経て、当館に寄託されたものです。

「明大新聞高等研究科原稿紙」に4枚にわたって書かれていますが、日付や署名がないことから、まだ続きがあったものと思われます。封筒も見つかっていません。

ロシアの作家チェーホフの中編「ブラック・ムンク」（邦題は「黒衣の僧」「黒法師」など）のあらすじを記し、高く評価して一読をすすめたもので、物語の最終章の一部、主人公が過去を回想する場面を中也独特の捉え方で語っています。

発見の経緯や内容から、安原喜弘宛で昭和9年後半から昭和11年10月にかけて書かれたものと推定されます。

チェーホフとの関係や、原稿用紙の入手経路など、今後の研究の進展が期待される資料です。

（書簡一枚目）

安原喜弘旧蔵書・レコード

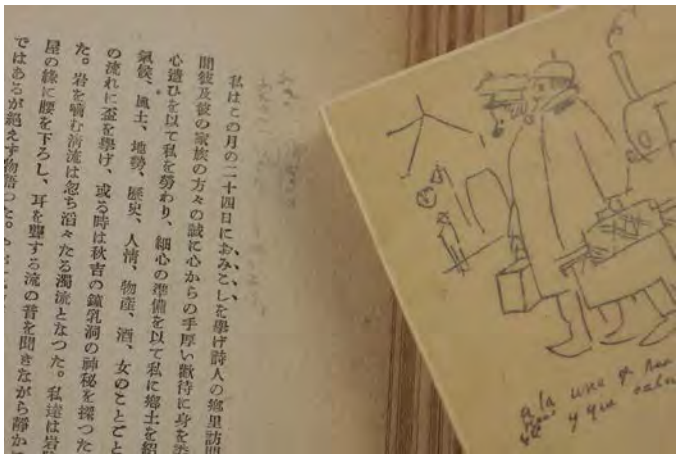
平成24年に開催した特別企画展「中原中也の手紙―安原喜弘との交友」および平成25年に神奈川近代文学館で開催された企画展「『中原中也の手紙』展―安原喜弘へ」の終了を機に、安原喜弘旧蔵資料がご子息の安原喜秀氏から寄贈されました。

内容は大きく文学関連資料と音楽関連資料に分けることができます。

文学関連資料は、書籍が169、雑誌が63の計232点で、戦前から戦後まで幅広い時代にわたります。特別企画展でご紹介した「遊歩場」「遊歩場週報」など安原が成城高校時代に関わった雑誌は、現在の成城学園にも残されていない貴重なものです。中也の詩や翻訳が掲載された雑誌「白痴群」「紀元」、『アンドレジイド全集』第3巻などには、そのまま中也との交友の軌跡となるもの。その他にも、昭和初年代に出版された川路柳虹訳『ゴルレーヌ詩集』、小林秀雄訳／ランボー『酩酊船』、河上徹太郎訳／ヴェルレーヌ『叡智』などの翻訳詩集、ランボー『地獄の季節』『イリュミナシオン』、ボードレール『悪の華』の原書などがあり、安原の文学的関心のありようを示すとともに、中也がともに手に取っていた姿を想像させるものです。

戦後の資料では、安原の書き入れのある『中原中也の手紙』や安原自身が編集に加わった創元社版『中原中也全集』をはじめとする中也の研究書や特集雑誌が目立っています。小林秀雄、河上徹太郎、大岡昇平の著書には献呈署名のあるものも多く、その後の交友ぶりをうかがわせます。

音楽関連資料の中心は143点のレコードで、3点のコンパクトLPを除いて大半がSPレコードです。ベートーベン、モーツァルトなどクラシックの名曲名演に、ダンス音楽や童謡のレコードが並びます。その他に、戦前に東京で開催されたクラシックコンサートのプログラム、チラシ、解説書なども多数あり、当時を知る貴重なコレクションになっています。



安原喜弘自身の書き込みがある著書『中原中也の手紙』（書肆ユリイカ版）

雑誌「詩人時代」昭和11年4月号

「詩人時代」は、昭和5年6月から昭和11年11月にかけて全62冊が刊行された詩雑誌です。主宰は吉野信夫、発行は詩人時代社（昭和8年8月に現代書房と改称）です。党派的な偏見をなくし、真に公平な立場に立ち、詩壇の公器的な存在になろうとの意図で創刊されました。

寄稿者は、河井酔茗（かわいすいめい）、佐藤惣之助、萩原朔太郎、小野十三郎（とおざぶろう）、北園克衛（きたそのかつえ）、村野四郎など多彩な顔ぶれがみられます。

中也は昭和10年8月号に随筆「夏」を、昭和11年4月号に詩「倦怠」（へとへとの、わたしの肉体よ、）を発表しています。

昭和11年4月号は、昭和42―46年刊『中原中也全集』（角川書店）編集時には、現物が確認されていたようですが、その後所在不明となり、平成12―16年刊『新編 中原中也全集』（角川書店）の編集時には詳細が未詳となっていました。

この度、古書店に出品され、「詩人時代」昭和10年8月号とともに当館が収蔵しました。

【「詩人時代」昭和11年4月号】
発行年月日：昭和11年4月1日
巻号：第6巻第4号 通巻第60号
出版元：現代書房
編集者：吉野信夫
印刷兼発行者：土屋弘

倦怠

へとへとの、わたしの肉体（からだ）よ、
まだ、それでも希望があるといふのか？
（洗ひざらした石の上（へ）に、
今日も日が照る、午後の日射しよ！）
市民館の狭い空地（あきち）で、
子供は遊ぶ、フットボールよ。
子供のジャケツはひどく安物、
それに夕陽はあたるのだ。

へとへとの、わたしの肉体（からだ）よ、
まだ、それでも希望があるといふのか？
（オヤ、お隣り は、ソプラノの稽古、
たまらなく、可笑（おか）しくなるがいいものか？）
オルガンヨ！ 混凝土（コンクリート）の上なる砂粒（すなつぶ）よ！
放課後の小学校よ！ 下駄箱よ！
おお君等聖なるものの上に、
――僕は夕陽を拝みましたよ！

（「詩人時代」発表形）

神奈川近代文学館 企画展「『中原中也の手紙』展 ―安原喜弘へ」

平成25年6月15日～8月4日

池上 聡

本展は、中原中也記念館の特別企画展「中原中也の手紙―安原喜弘との交友」の準備段階から、同展の関東地方への巡回展としての要素を持つものとして構想されました。本展開催の最大の意義は、記念館では展示スペースの関係で叶わなかった、安原あて中也書簡102通の全点同時展示を実現したこと。それにより、安原に送られた詩稿も含め、書簡を日付順に陳列でき、二人の生涯と交友の軌跡をそのまま辿ることが可能になった点にあると考えます。また、各書簡に対応する安原の注釈、感想を安原の著書『中原中也の手紙』から引用して多数パネル展示することで、視点を安原一人に絞って中也の肖像を描き出し、従来の展覧会とは一線を画すことを意図しました。

安原喜弘の生涯と業績については、特に記念館での構成に付け加えた終章部分で、中也没後の安原の足跡をご遺族所蔵の資料で紹介したほか、各スポット展示では、陶芸家の長兄・安原喜明（きめい）をはじめとする安原の家族や、当館の地元・横浜と二人との接点について詳しく紹介する機会を得ました。

また、本展開催直前に、ご遺族が保存されていた安原の遺品の中から、安原あてと推定される新たな中也書簡4枚が確認されたことも印象深い出来事でした。このことは、本共催展開催のための調査における共催両館の協力の賜物と言えます。

会期中の来場者数は3898名を数え、アンケートには、山口まで足を運べなかったファンの喜びの声や、手紙の受け手である安原に対する新たな関心を呼び起こされた、といった感想が寄せられました。

開催に際して惜しみないご協力を頂きました中原家と安原家の皆様、中原中也記念館をはじめとする関係各位に深く感謝申し上げます。

（神奈川近代文学館　展示課・当時）

開館20周年プレイベント 中也ウィーク

平成25年10月19日～10月26日

中也の命日10月22日を含む1週間を「中也ウィーク」と銘打ち、墓前祭をはじめ、さまざまなイベントを開催しました。

19日は、バスツアー文学散歩「岩国探訪」を行いました。一般財団法人山口観光コンベンション協会の主催により催されたこのツアーでは、当時開催していた特別企画展「『文学界』と中原中也―一九三〇年代の文芸復興」の内容に合わせ、雑誌「文学界」と関わりがあった岩国出身の文学者・河上徹太郎と宇野千代ゆかりの地などを巡りました。

20日は「中也忌」として、昼から夜にかけてイベントを開催。昼に第1部として「墓前祭」を行いました。まず吉敷（よしき）の経塚（きょうづか）墓地にある中原家累代墓にお参りし、それから中也の詩「一つのメルヘン」を墓前で参加者の皆様と一緒に朗読しました。そして第2部は閉館後の記念館を会場として、朗読会と蓄音器コンサート「中也に捧げる夕べ」を開催しました。客席から見える窓の外には、前庭に設置されたキャンドルの灯りがゆらめき、やさしい雰囲気の中で、朗読と蓄音機の音色を楽しんでいただきました。

26日は、「一箱古本市&カフェ」を開催しました。一箱古本市とは、東京の「不忍ブックストリート」が始めた、段ボール一箱におさめた古本を販売できるフリーマーケット方式の古本市です。一般の方とともに、近隣の古書店も参加して下さり、重厚な専門書から文庫まで、様々な種類の本が並びました。この古本市にあわせて、山口県立大学の学生によるカフェが開店。カフェでは、「メイシ（名詩／名刺）交換会」というイベントも開かれました。

いずれのイベントも天気に恵まれ、多くの方にご参加いただきました。

中原中也記念館開館20周年記念事業紹介 20th Anniversary

中原中也記念館は、平成26年2月に開館20周年を迎え、
11月末までさまざまな企画事業を実施していきます。
各事業の詳細は、記念館ホームページなどでお知らせします。

中原中也記念館
開 館 20 周 年

【展示】中原中也記念館

第11回常設テーマ展示
「中也　愛の詩―いとしい者へ」
2月16日(日)～平成27年2月15日(日)＊特別企画展開催中を除く

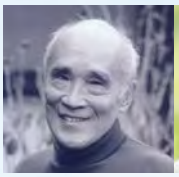
企画展Ⅰ
「中原中也記念館の20年」
2月16日(日)～7月27日(日)

特別企画展
「中原中也と日本の詩」
7月31日(木)～9月28日(日)

【イベント】

映画で知る中原中也
「眠れ蜜」上映&トークイベント
ゲスト：佐々木幹郎(詩人)
2月16日(日) 上映14:00～・トークイベント15:30～
／山口情報芸術センター[YCAM]

生誕祭「空の下の朗読会」
ゲスト：谷川俊太郎(詩人)、谷川賢作(作曲家・ピアニスト)
4月29日(火・祝) 12:30～15:00／中原中也記念館


© 菊池一郎

© 深堀瑞穂

トークセッション
「中原中也、その愛と魅力と謎」
ゲスト：川上未映子(作家)、穂村弘(歌人)
4月29日(火・祝) 17:10～18:30／山口市民会館

© 石倉和夫

子どものための詩作ワークショップ
講師：和合亮一(詩人)
5月4日(日・祝)～6日(火・振休)／クリエイティブ・スペース赤れんが

中原中也詩英訳パネルディスカッション
パネリスト：伊藤比呂美(詩人)
ジェローム・ローゼンバーグ(詩人・民俗学者)
ジェフリー・アングルス(西ミシガン大学准教授)
アーサー・ビナード(詩人・俳人・随筆家・翻訳家)
四元康祐(詩人)
7月13日(日)／ホテル松政

中原中也に関する公開講演
講師：池澤夏樹(作家)
9月14日(日)／ホテル松政

講師：大林宣彦(映画作家)
10月(予定)／山口情報芸術センター[YCAM]

YCAMとのコラボレーション企画
10月1日(水)～11月末(予定)
＊企画展Ⅱの中で実施／中原中也記念館

※このほか、公式ガイドブック『中原中也の世界』の発行(2月16日)、館内BGM・DVD映像のリニューアル(2月16日)、20周年記念オリジナル・グッズの制作(2月16日及び以降)、「記念館オリジナル詩集」の制作・旅館等への配布(4月)、中也関連イベントへの助成(4月～平成27年3月)、「中学生向け副読本」の編集・制作(平成27年3月予定)などを実施・予定しています。

主なできごと（平成25年度　記念館事業・関連行事記録）　2013年4月—2014年3月

4月2日　特別展示：震災復興応援企画（前年度から継続）
東北を中心とした文学館の紹介、
草野心平・尾形亀之助の詩を展示

26日　特別展示：第18回中原中也賞（～5月26日）
細田傳造『谷間の百合』

第107回 中也を読む会
第18回中原中也賞、細田傳造『谷間の百合』を読む

29日　生誕祭「空の下の朗読会」（記念館前庭）
自由参加の朗読（朗読参加者33名）
カルメン・マキ　コンサート

プロムナード・トーク　常設テーマ展示解説

第18回中原中也賞贈呈式（ホテル松政）
受賞詩集：細田傳造『谷間の百合』（書肆山田）
記念講演「口ずさむ詩歌」
講師：坪内稔典
主催：山口市

「空の下の朗読会」コンサート

30日　第1回 運営協議会

5月24日　第108回 中也を読む会
屋外展示「空の詩」を読む—「この小児」「蛙声」

6月15日　『中原中也の手紙』展—安原喜弘へ（～8月4日）（神奈川近代文学館）
主催：神奈川近代文学館・（公財）神奈川文学振興会、中原中也記念館

28日　第109回 中也を読む会
企画展「旅する中也—汽車の笛聞こえもくれば」見学

7月26日　第110回 中也を読む会　中村稔の詩を読む

8月13日　特別展示：新発見書簡展示（～8月25日）
安原喜弘宛中原中也書簡

23日　第111回 中也を読む会　まど・みちおの詩を読む

29日　特別企画展「『文学界』と中原中也—1930年代の文芸復興」
（～10月31日）
オープニングセレモニー開催

31日　機関誌「中原中也研究」第18号発行

9月14日　第1回公開講演（ホテルニュータナカ）
「中原中也の歩みと『文芸復興』期」
講師：鈴木貞美
共催：中原中也の会

第1回公開講演

27日　第112回 中也を読む会
特別企画展「『文学界』と中原中也—1930年代の文芸復興」見学

22日　プロムナード・トーク①　特別企画展解説

10月6日　ワークショップ「青山二郎の眼と手を真似ぶ」
講師：荒瀬景敏

13日　プロムナード・トーク②　特別企画展解説

19日　文学散歩～岩国探訪～
特別企画展「『文学界』と中原中也—1930年代の文芸復興」関連イベント
主催：（一財）山口観光コンベンション協会

20日　中也忌～墓前祭と中也に捧げる夕べ～（経塚墓地、中原中也記念館）

22日　中也命日、お墓参り

25日　第113回 中也を読む会　福田名誉館長と中也の詩「骨」を読む

26日　一箱古本市&カフェ

11月1日　改修工事のため休館（～平成26年2月15日）

22日　第114回 中也を読む会　宮沢賢治の詩を読む

29日　第2回 運営協議会

12月27日　第115回 中也を読む会　中也が聴いた音楽

中也カフェ

1月24日　第116回 中也を読む会　「こぞの雪今いづこ」を読む

2月16日　開館20周年記念式典、無料開館（～2月28日）

第11回常設テーマ展示「中也　愛の詩—いとしい者へ」
（～平成27年2月15日）

平成26年度企画展Ⅰ「中原中也記念館の20年」（～7月27日）

映画で知る中也（山口情報芸術センター）
映画「眠れ蜜」上映、トークイベント（第2回公開講演）
ゲスト：佐々木幹郎

開館20周年記念式典

18日　開館20周年

26日　入館者60万人達成

28日　第117回 中也を読む会
常設テーマ展示「中也　愛の詩—いとしい者へ」見学

3月1日　山口お宝展（～4月6日）
「新文芸日記」、正岡忠三郎宛中原中也書簡の展示
主催：山口商工会議所

11日　特別展示：「関東大震災と中原中也」
全国文学館協議会加盟館との共同展
「3.11　文学館からのメッセージ」への参加企画（～3月30日）

28日　第118回 中也を読む会　立原道造の詩を読む

31日　館報第19号発行

中原中也の会

6月1日　中原中也の会第17回研究集会
「若山牧水没後85年　中原中也と若山牧水—愛をめぐって」
文学散歩（若山牧水記念文学館、牧水生家、高森文夫ゆかりの地ほか）

2日　研究集会（ベルフォート日向）
総合司会：中原豊
講演「青春のやうに悲しかつた—中也と文夫、その友情の軌跡」
講師：福島泰樹
公開対談「中也と牧水—日本人にとっての故郷（ふるさと）」
対談：伊藤一彦、佐々木幹郎
主催：中原中也の会、日向市

7月31日　会報第34号発行

9月14日　中原中也の会第18回大会「1930年代と中原中也」（ホテルニュータナカ）
総合司会：たかとう匡子
講演「中原中也の歩みと『文芸復興』期」
講師：鈴木貞美
特別公演　鷺流狂言「鬼瓦」
出演：山口鷺流狂言保存会（米本文明、米本太郎）
解説：稲田秀雄
シンポジウム「1930年代の光と影—中也から見たモダンの諸相」
パネリスト：高橋世織、疋田雅昭　司会：青木健

15日　中原中也の会第14回セミナー（ホテルニュータナカ・中原中也記念館）
セミナー「野々上慶一と出版—文圃堂書店と十一組出版部」
講師：池田誠

特別企画展「『文学界』と中原中也—1930年代の文芸復興」見学
解説：池田誠

12月25日　会報第35号発行

◎第19回中原中也賞

『指差すことができない』

大崎清夏（おおさきさやか）氏

第19回の中原中也賞は、公募および推薦による228詩集の中から、大崎清夏さんの『指差すことができない』（アナグマ社）が選ばれました。

大崎さんは昭和57年生まれの31歳（受賞時）。神奈川県相模市出身で、早稲田大学第一文学部を卒業し、2009年から「ユリイカ」へ投稿をはじめ、2011年には「ユリイカの新人」に選ばれました。「現代詩手帖」などの雑誌の他、インターネットの詩歌ブログ「日々が紙から飛びだして」などに作品を発表しています。

『指差すことができない』は、「らくだは苦もなく砂丘になる」他の18篇で構成されており、大崎さんにとっては第二詩集にあたります。2011年に出版した第一詩集『地面』（アナグマ社）も第17回中原中也賞の最終候補詩集に選ばれており、先行する詩集に続いて候補となった詩集が受賞に至ったのは初めてのことです。最終選考会では〈前詩集から格段の成長があった〉点も高く評価されました。

境界線をきめる協議が
きょうもいたるところにあって
健康には定義がなくなった
吸収してもくるしい
排泄してもくるしい
だからたのしい気持ちで
働くしかなくなった
ごつごつした岩場に生える
黒髪のような海藻をはがして
それを食べたり
売ったりしながら
女の子たちは笑っている

（『指差すことができない』より）

最終的に大崎清夏の神話と寓話の構造を底に秘めた詩集『指差すことができない』が、これまでにない大きな構想力を持った詩集として評価された。島にいる「神」の顔が波や泡で出来ているというところから始まって、娘と森、砂丘になるらくだ、など作者が組み立てた幻想の物語は、ユーモアを持ちながら、言葉は限りなく開かれている。（「選評」より）

写真：渡邊聖子

Chuya Nakahara prize 19th

◎平成26年度　記念館事業・関連行事予定　2014年4月―2015年3月

2月16日	第11回常設テーマ展示 「中也　愛の詩―いとしい者へ」 （～7月27日） 企画展Ⅰ「中原中也記念館の20年」 （～7月27日）
4月29日	生誕祭「空の下の朗読会」 （会場：中原中也記念館前庭）〈無料開館日〉 トークセッション 「中原中也、その愛と魅力と謎」 川上未映子×穂村弘 （会場：山口市民会館）
5月4日～6日	子どものための詩作ワークショップ （会場：クリエイティブ・スペース赤れんが）
5月5日	こどもの日〈無料開館日〉
6月7日	中原中也の会第18回研究集会 （会場：愛知大学豊橋校舎）
7月13日	中原中也詩英訳パネルディスカッション （会場：ホテル松政）
7月31日	特別企画展 「中原中也と日本の詩」（～9月28日）
9月13日	中原中也の会第19回大会 （会場：ホテルニュータナカ）
9月14日	中原中也の会第15回セミナー （会場：ホテルニュータナカ・中原中也記念館） 公開講演 （会場：ホテル松政）
10月1日	企画展Ⅱ（コラボレーション企画） （～3月予定）
10月22日	中也命日、お墓参り
10月（予定）	映画で知る中原中也 （会場：山口情報芸術センター）
10月（予定）	公開講演 （会場：山口情報芸術センター）
平成27年2月18日	第12回常設テーマ展示 「宗教性」（仮） （～平成27年2月下旬）
2月18日	開館21周年

※日程等、変更の場合がございます。

中原中也記念館 館報【第19号】平成26年3月31日

発行◎ 中原中也記念館　〒753-0056 山口県山口市湯田温泉1丁目11-21 TEL083-932-6430 FAX083-932-6431 E-mail:chuyakan@c-able.ne.jp http://www.chuyakan.jp/

環境に配慮し、用紙には再生紙を使用しています。印刷インキは植物性大豆油インキを使用しています。